

研究課題	「住み続けられるまちづくり」をめざして取り組む「よごふるさと科」
副題	～広く世界に発信できる児童生徒の育成～
キーワード	小中一貫教育、義務教育学校、思考力・判断力・表現力、ICT 活用、独自カリキュラム、ふるさと
学校/団体名	長浜市立余呉小中学校
所在地	〒529-0515 滋賀県長浜市余呉町中之郷 777
ホームページ	http://yogo-es.nagahama.ed.jp/

1. 研究の背景

長浜市立余呉小中学校は、平成30年4月に滋賀県で最初の施設一体型小中一貫教育校（義務教育学校）として開校した。義務教育学校は、従来の小学校と中学校という枠組みを外して、発達段階に応じた柔軟な指導をおこなうことができる新しい学校の形である。1年生から4年生を第1ステージ、5年生から7年生を第2ステージ、8年生から9年生を第3ステージとし、4-3-2制を採り入れて、9年間の学びをつないでいる。その中で、各ステージでの発達段階に即した指導の充実を図り、系統性・連続性を生かした教育を推進し、4・7・9年生の責任感や自己有用感を育てている。

また、義務教育9年間を見通した教育課程の創意工夫で子ども達の確かな学力の定着をはかり、異学年交流や地域との交流など多様な交流で、豊かな人間性と社会性を育てている。

学園生数は1年生から9年生まで合わせても133名の小規模校である。この義務教育学校であることと小規模校であることを最大限に生かし、未来をたくましく生き抜く力と故郷「余呉」を愛する豊かな心をもった学園生を育成してほしいという地域の熱い願いが学校教育目標「余呉に学び 大きな心で未来を生きぬく～しなやかに そして たくましく～」に込められている。その地域の願いに応えられるように、前身の余呉小学校と鏡岡中学校で培われてきた「地域学習」を基盤にして、「よごふるさと科」（生活科・総合的な学習の時間）を立ち上げ、これを中心に9年間を貫いたカリキュラム・マネジメントに取り組んでいる。

また、学校運営協議会が中心になり、「地域とともにある学校」を推進していくために様々な場面で参画をいただいている。「よごふるさと科」での学習や、よごトーク（4者熟議）などは本校の地域協働の特色である。

2. 研究の目的

「よごふるさと科」では単に地域の支援を受けるだけではなく、地域とともに考え、地域に貢献していくことで地域の活性化を図りたいと取り組んでいる。

学園生が自身の考えを企画し実践したことをもとに地域への提言として発信することは必ずや学園生の主体性や社会性を育み、故郷を愛する豊かな心を育むと考えている。

今回の研究課題である、「住み続けられるまちづくり」をめざして取り組む「よごふるさと科」～広く世界に発信できる児童生徒の育成～ を推進していく中で、ふるさと「余呉」の課題に向き合い、SDGs10「住み続けられるまちづくり」を目標にして、その解決のために自ら行動する学

園生の育成を大切にしていきたい。

本研究の目的は「地域に開かれ、地域に発信し貢献する児童生徒を生み出す学校づくり」である。地域に発信し貢献する体験は、将来たとえ余呉を離れたとしても故郷に愛着をもち続け、また社会に出たときにも自分のアイデアや働きかけでより良いものを生み出そうとする原動力になると考える。

まず1年生から7年生では、児童生徒の発達段階に応じて、ふるさと余呉の自然、文化、歴史、くらし、産業に体験的に関わり、学習を積み重ねる。そして学習した内容をICTを活用して発表したり、演劇活動を通じて表現したりする。その学習活動や発表活動の中で、きっと児童生徒は余呉の良さや課題に気づき、その解決策を考えることができるようになるであろう。

そして8、9年生の「余呉を楽しむプロジェクト」で生徒の発想やアイデアを形にして実践する。実践は調査活動、イベントの企画、商品化、宣伝活動など地域に関わり、貢献する活動である。2年間をかけて主体的に実践活動に取り組むことで、ふるさと余呉を愛する心が育まれるとともに、積極的に社会に働きかけていこうとする生徒を育成できると考える。

3. 研究の経過

「よごふるさと科」（生活科、総合的な学習の時間）は、余呉のよさや課題に気づいたり、余呉の魅力や課題を学び、まとめ、伝えたりする学習が主な活動である。体験や調査活動を通して、課題を追求し解決する資質や能力を培っている。

また、調べたことをまとめ、伝えることを通して表現力や思考力を育むことにもつながる。このような学びを通して、子どもたちはふるさと余呉を愛し、この地の自然、文化、歴史、くらし、産業に関わろう、自ら課題をみつけ主体的に考えようと成長していく。さらに地域の方など多くの人との関わりの中で、様々な考え方、人の生き方に触れることにより、自己の生き方や将来について考える「生き方教育」でもあるのが「よごふるさと科」である。

特に、開校以来、地域と連携し「上丹生茶碗祭り」や「下余呉太鼓踊り」の保存と継承に取り組む、様々な場面で成果をあげた。（日本の祭り in ながはま等で披露）

8、9年生の「余呉を楽しむプロジェクト」は、「よごふるさと科」で地域の再認識・再発見・発信等を行う学習である。学園生たちが自分たちで活動内容や計画を決め取り組んでいます。地元の民話を元にしたゆるキャラ作りや地域の名産品を使った料理やグッズ、SNSを使った地域の名所の紹介などさまざまな活動を行っている。今までの体験や調査活動を通して、課題を追究していく取組を通じ、調べたことをまとめ、伝えることを通して、地域の方など様々な人に学ぶ学習である。



本校開校時から始まった活動を活かしながら、新たな視点で取り組んでいる例もある。ゆるキャラ制作→ゆるキャラの看板→LINE スタンプやYouTubeチャンネルの作成→グッズ制作へと毎年活動内容を広げている。

8年生時に、9年生と一緒に活動することで、次年度自分たちがどのように活動するのかイメ

ージ付けを行い、活動が代々受け継がれていく形も作っている。また、地域の方々とも交流し、さまざまなアイデアをいただいている。

4. 代表的な実践

(1) 余呉を楽しむプロジェクト(8, 9 年)

5月のオリエンテーションでは、「余呉を楽しむプロジェクト」の主旨についての説明を聞いた後、一人ひとりの生徒が自分のアイデアを1枚の紙にまとめて発表した。お互いのアイデアについて質問や意見を交換した後、同じ方向で進めていける者同士でグループを作り、取り組む具体的な内容について話し合い、決定した。



今年度は「天女ちゃんグッズ製作」「自転車でよごを楽しむ」

「たくさんの人にもっと余呉を知ってほしい」「音楽の力で、余呉を活性化!」「SNSでよごのよさをひろげよう」「余呉にはない新しく面白いものを作ろう」の6グループが生まれた。7月にはそれまでの取り組みや方向性についてまとめ、それぞれのグループが中間発表を行った。

中間発表会では教育委員会事務局職員や学校運営協議会委員から各グループに講評してもらった。そして修正等を加えて8、9、10月に実践し、活動内容や提言についてタブレットを使ってまとめた。

最終的には10月29日に開催した、第6回小中一貫教育小規模校全国サミット in 長浜で、対面とオンラインのハイブリッド形式で発表した。

対面形式で参加した1～7年生は、この発表を見ることによって、自分たちが学んでいる「よごふるさと科」のゴールのイメージを持つことにもつながった。



このサミットでは、広島県宮島小中学校、新潟県まつのやま学園、奈良県田原小中学校、京都府大原学園とzoomを使っての実践交流を行った。本校の取組について、参加校から意見や質問を受けるスタイルで進めた。参加校からも様々な意見をいただき、今後の取組のヒントがもたらされた。

また、今回のサミットは、ハイブリッドでの開催となったことで、全国からたくさんの方がオンライン参加をしていただいた。チャットを通じての感想も多くいただいた。

各グループの取組

① 天女ちゃんグッズ製作

リサイクル石けんの販売

余呉の環境を考え、廃油の処理に取り組んでいる人の取材から、回収メーカーや製造メーカーの人とつながりました。私たちができることについていろいろと考えました。今日は、リサイクル石けんの販売について発表します。



② 音楽の力で、余呉を活性化！～Revitalize Yogo with the power of our music～

音楽班

音楽で余呉の活性化をテーマに、Garage Bandなどのアプリを使い、曲作りを行いました。最終的には、YouTube 班とも連携し、曲を広めていきたいと考えています。余呉には、まだ見ぬ魅力がたくさん。その魅力を歌にしてお届けします！

③ 自転車でよごを楽しむ

スタンプラリー

自転車やウォーキングで余呉町を回り、まだ知られていないお店や観光場所を知ってもらいたい。そして楽しんで欲しいという思いでこの企画をしました。余呉湖を中心に組み立ちました。ぜひ一度、参加してみてください。



④ たくさんの人にもっと余呉を知ってほしい

YouTube での発信

YouTube 班では、余呉とキャラクターの「そらめちゃん」を多くの人に知ってもらうために、動画をつくり、YouTube にアップしています。今年度は人数も増え、いろんな情報を発信したいと思っています。



⑤ SNSでよごのよさをひろげよう

インスタグラム

キャラクターの「そらめちゃん」を使い、余呉の美しい自然やお店を、インスタグラムで紹介し、余呉の魅力を多くの人に知ってもらう事を目的として活動しました。余呉に来る人が増え、余呉が元気になればいいなと思っています。

⑥ 余呉にはない新しく面白いものを作ろう

ジェットコースターづくり

余呉にないものを作ろうということで、私たちは教室でできるジェットコースターを作ります。高校の文化祭でやっていたのを YouTube で見てやろうと思いました。安全性を考えて、みんなが楽しめるものができるようにがんばりたいです。

⑦ 地産地消でよごふるさとを味わう

余呉を味わう

食品班では、余呉の食材を使った料理や、余呉をイメージしたお菓子を考えました。作り方などは SNS にあげて誰でも余呉を味わえるようにしたので、ぜひ自分たちでも作ってみてください。

(2) 4者熟議（よごトーク）

昨年度実施できなかった「4者熟議」や「講演会」は、感染症防止対策をしっかりと行って実施した。「4者熟議」とは、学園生、保護者、地域の方々、教職員が、様々な思い出し合い、具体的なアクションにつなげる取組である。

また、この「4者熟議」から取り組んだ「早寝早起き朝ごはんカレンダー」も、学園生、保護者、学校運営協議会などと協働し、今年度で3回目の発行ができた。地域と思いを共有することや、学園生もコミュニティの一員であるという自覚を持つことができ、当事者意識が育ってきたと感じる。

実施日 12月4日（土）

場 所 余呉小中学校ランチルーム

参加者 学園生、保護者、学校運営協議会、教職員

テーマ 「すてきな学校を作ろう！」

話されたキーワード

- ・早寝早起き朝ごはんの推進・親子のコミュニケーション
- ・家庭での約束（SNS）・生活習慣



5. 研究の成果

(1) 地域への発信と貢献

前出の「4者熟議」から取り組んだ「早寝早起き朝ごはんカレンダー」を学園生、保護者、学校運営協議会などと協働し発行できた。

その中には、学園生が取り組んだ標語コンクールとともに、8・9年生の取り組んだ余呉を楽しむプロジェクトのYouTubeの動画紹介とQRコードを掲載し、余呉地域全戸に配布した。

このような取組を進めることで、地域と思いを共有することや、学園生もコミュニティの一員であるという自覚をもつことができ、当事者意識が育ってきたと感じる。



(2) 自尊感情の向上

本校では、年に2回、学園生、保護者、教職員による学校評価を行って、様々な取組に活かしている。学園生の自尊感情に関する項目では、内閣府の調査結果(2018)に比べると大きく上回っている。この項目は、様々な学びを通じて、多くの人と交わることにより向上していくと考える。

このよごふるさと科では、学園生の小さな変化や成長の過程に合わせての手だてを進めていくことが大事だと考える。

副次的な作用として家庭内で学校に関する会話が増えたことが認められる。こうした、コミュニケーションを促せたことも大きな成果であった。また、規則正しい生活に対する数値も向上し

ている。

今後とも、よごふるさと科の取組については、地域や家庭との連携を十分図りながら、推進していきたい。

6. 今後の課題・展望

(1) 発信力の拡大、遠隔授業の実現

本校の取り組みを余呉、長浜市内だけではなく、広く滋賀県、他府県、さらには海外に広がっていくことが今後の課題である。そのため、SNSを活用しての情報発信をさらにすすめていきたい。

また、サミットで実践した遠隔授業にも積極的に取り組んでいくとともに、課題解決のために、様々な企業や機関とつながっていききたい。(R3年度は、滋賀県庁、琵琶湖・淀川水質保全機構)



(2) 「よごふるさと科」「余呉を楽しむプロジェクト」を持続可能な取組にする体制づくり

教職員は異動により入れ替わり、義務教育学校として開校した当初の地域の熱い思いや学校理念がやや希薄になっていくことが予測できる。特に「総合的な学習の時間」は専門の教科担当もなく、若返りの中で教職員の経験値にもかなり差が出てくる。今まで積み上げてきた「よごふるさと科」「余呉を楽しむプロジェクト」が持続できるような仕組みや体制をつくるのが課題である。そのためにも、「社会に開かれた教育課程」の考えのもと、学校運営協議会が中心となり、「社会とともに創る教育課程」の取組も大切である。学園生の取り組みが、保護者や地域の人々を啓発し、学校と地域がともに学び育っていくことにつながると思う。



7. おわりに

今年度の研究推進にあたって、この研究助成をいただいたことで、学園生が発想したアイデアを実現することができたと深く感謝いたします。

これからの時代に生きる子どもたちは創造力を働かせることが生き抜くための大切な力であると考えます。しかし、私たちが忘れてはいけないのは、創造力は教え込むものではないということです。子どもたちの発想にはすでにキラキラ輝くものがいっぱい詰まっているのではないのでしょうか。もっと子どもの感性・発想を大切にすべきだと考えます。そして自分たちの知識や経験を、子どもの発想を広げるために使うのです。教え込む教育ではなく、自ら学ぼうとする力を育てる教育への転換を、この研究で果たしていけたらと思います。

8. 参考文献

・なし